

日田の古代

日田、吹上遺跡出土品 国の重文指定 大分合同新聞社より

日田市の吹上遺跡から出土した甕棺墓（かめかんぼ）から見つかった副葬品。下にあるのが成人男性の装身具とされるゴホウラ製貝輪、日田市の吹上遺跡から出土した甕棺墓（かめかんぼ）から見つかった副葬品。下にあるのが成人男性の装身具とされるゴホウラ製貝輪（日田市提供）
国の文化審議会（西原鈴子会長）は19日、日田市小迫の吹上遺跡から出土した銅剣や貝輪などの装飾品、甕棺墓（かめかんぼ）など計577点を含む38件を重要文化財に指定するように答申した。県内の重要文化財は76件目。考古資料としては3件目で、発掘調査による出土品で指定を受けるのは初めて

吹上遺跡は市北部の吹上原台地に所在し、県史跡に指定されている。1995年度の調査で、弥生時代（紀元前3世紀～1世紀）の有力者の墓とされる甕棺墓7基、木棺墓（もっかんぼ）3基が見つかった。

墓から銅剣や銅戈（どうか）などの武器類、貝輪、勾玉（まがたま）などの装飾品が出土した。珍しいのは人骨に装着した状態で見つかった貝輪。ゴホウラ製貝輪15点は成人男性、イモガイ製貝輪17点は成人女性のものとみられ、当時の人々が性別で装飾品を使い分けたことを裏付ける珍しい資料という。日田市の合原多賀雄教育長は「日田の歴史の奥深さが認められ、非常に名誉」と話している。

小迫辻原遺跡（日本最古の豪族居館跡）

（概要）

盆地北部の通称辻原台地で古墳時代前期の二基の環壕居館跡が発見された。これらの遺構の中からは3C末～4C初年代と考えられる土器が出土しており県史跡指定となっている。

ガランドヤ古墳

（概要）

三隈川左岸の沖積地に東西に並ぶ3基の横穴式石室古墳。封土は流失し、2一基の古墳はほとんど破壊されて、第1号古墳のみ保存されている。県指定史跡である。

（文献）

日田市の中心より南西約3km、国道210号線沿い、三隈川左岸の沖積地に東西に並ぶ3基の横穴式石室古墳。中央が第1号古墳、西側が第2号、東側が第3号。封土は流失し、2、3号古墳はほとんど破壊されて、第1号古墳のみ保存されている。

南に開口する複室構造、全長6.5m、後室の幅2.7m、高さ3.2mである。装飾は奥壁に赤及び緑色を以て彩色画が描かれている。ほぼ中央の下部に波と二腰の舟、その上に円文・騎馬人物・飛鳥かトンボと思われるものが描かれている。また、この古墳背後の隈山は古墳時代遺跡で石棺が出土し、土偶片が発見されたことがある。昭和三十九年二月二十一日に県史跡に指定される。ガランドヤ第一号古墳奥壁の彩色画また、目下先生、玄武などの四神が描かれているともいう 出典 日田市40年史

日田の古墳文化

（概要）

装飾古墳は肥後北部から筑後地域に顕著に認められるもので、日田地方は筑後地方の影響を強く受けている。また日田地方の主要な古墳の分布を見ると、日田盆地を取り囲むように各地区に存在しているのである。これらの古墳の分布はあたかも小地域を拠点とする首長墓ないし、それに準ずる豪族の墳墓を彷彿させる。

（文献）

日田盆地の古墳文化を象徴するものは、籬籬・ば廣等詣苦海三号墳・ガランドヤ古墳などの装飾古墳である。装飾古墳は肥後北部から筑後地域に顕著に認められるもので、筑後川上流域にあたる日田地方は筑後地方の影響を強く受けていることになる。また日田地方の主要な古墳の分布を見ると、日田盆地を取り囲むように各地区に、すなわち、豪族居館跡のが島蓮鑑遺跡がある西北部の朝日地区には前方後円墳の天満古墳群が、東北部の有田地区に城山古墳・有田古墳が、東南部の業徳地区には法恩寺山古墳群、さらに西南部の石井地区には前方後円墳の護国寺一号墳・穴観音寺古墳・ガランドヤ古墳が存在しているのである。これらの古墳の分布はあたかも小地域を拠点とする首長墓ないし、それに準ずる豪族の墳墓を彷彿させる。

高塚古墳の被葬者として推定される首長や豪族クラスの生活根拠地と考えられる大規模な環壕を持つ建物跡が、日田盆地西北部の小迫辻原遺跡で発見されている。古墳との関連についてはこの豪族居館が古墳時代初頭のものであるのに対して、日田盆地周辺に該当する時期の古墳が認められてなく、古墳時代初頭におけるヤマト政権と古墳築造、それと地方豪族との関連などに大きな問題を投げかけている重要な遺跡である。

出典 日本の古代遺跡 大分

土蜘蛛伝承

土蜘蛛については『日本書紀』神武（じんむ）天皇即位前紀己未年二月条に、大和国（奈良県）の新城戸畔（にいぎとべ）等の土蜘蛛が天皇に帰順せず、天皇に討たれたとあるのが初見である。同書には続けて「又高尾張邑（たかおはりのむら）に土蜘蛛有り、其の為人（ひととなり）身短くして手足長し」とある。特に『日本書紀』景行紀、および『豊後国風土記』はじめ各国の「風土記」にも度々登場する。その名は、身体の特徴が蜘蛛（くも）に似ていることからくもという説もあるが、津田左右吉はヤマト政権に容易に従わなかった地方の小首長の卑称であり、「身体短く手足長し」と書かれたり、穴居したり石屋に住んだりしたなどとされるのも、土蜘蛛の名から作りあげられた説話であろうとする（日本古典文学大系版『日本書紀』上の補注）。

平野邦雄は、これらの土蜘蛛が、多くは内陸の平野、山間、盆地や辺島に居住すること、その名もハギ（剥）、カ（鹿）、サル（猿）、イ（猪）など動物名になぞらえたものが多いことなど、海岸部の海人系集団と対照的に描かれていることに注目し、土蜘蛛の伝承は、大和王権の支配が内陸の農耕を伴う土豪まで及ばない段階を反映しているとみている。その時期は国造（くにのみやつこ）制の成立より以前、おそらく5世紀の社会であろうとしている。注目すべき所見であるが、実際には大和王権が地方にその勢力をのぼして行く過程は、海岸部と内陸部でそれほど差があるとは思えない。大分県でみても、大和王権の支配と直接関係すると見られる前方後円墳は、5世紀には明らかに日田や直入、大野など内陸部に深く及んでいるのである。

そこで、もう少し詳しくこの伝承のあり方を見てみよう。はじめに記したように土蜘蛛伝承は『日本書紀』神武紀や景行紀のほか、豊後常陸（ひたち）越後摂津日向肥前等の各国風土記に散見するが、特に肥前豊後両風土記には数多くみられるものである。すなわち『豊後国風土記』では日田郡石井郷の土蜘蛛、同じく日田郡五馬山（いつまやま）の五馬媛（いつまひめ）、直入郡瀬野（ねぎの）の打（うちさる）八田（やた）国摩呂（くにまろ）、大野郡網磯野（あみしの）の小竹鹿奥（しぬかおき）小竹鹿臣（しぬかおみ）、速見郡の土蜘蛛御青白（みあきしろ）等が見える。また『肥前国風土記』には、佐嘉郡佐嘉川上流の大山田女狹山田女、小城郡の土蜘蛛、松浦那賀周里の梅松權媛（みるかしひめ）、大家島の大身、値嘉島の大耳 垂耳、杵嶋郡媛子山の八十女、能美郷の大白 中白 少白、彼杵郡遠来村の土蜘蛛、浮穴郷の浮穴沫媛（うきあなわひめ）、周賀郷の麴比表麻呂（うつひおまろ）等々がみえる。

また『日本書紀』景行紀12年条には、土蜘蛛の名こそつけられていないが、ウサの川上に住む鼻垂（はなたり）、御木川の川上に住む耳垂（みみたり）、高羽川の川上の麻剥（あさはぎ）、そして緑野の川上に住む土折（つちおり）猪折（いおり）等が、それぞれ天皇に従う首長として登場する。

これらを見てまず気付くことは、これらの土蜘蛛が、地方の山間部や離島など、きわめて限定された狭い地域に住んでいるとされていることである。例えば、日田郡の五馬媛は日田郡の南の方の五馬山に住んでいるし、直入郡の打、八田、国摩侶等は直入郡の柏原（かしわばる）郷の南に住んでいる。緑野川上流の土折、猪折などは、「山川の険しき」をたのんで人民を掠奪すると記されている。彼らは、律令時代の郡や郷に例えていえば、一つの郡全体を領域とするというようなことはほとんどなく、むしろその辺境の小地域に住むとされているのである。そしてこれらの土蜘蛛の居住地の近くには、日田郡の久津媛や速見郡の速津媛（はやつひめ）のように、大和王権に対し従順で協力的な首長がいる。しかもその地域の方が地域的には中心部に位置するとみられるのである。したがって土蜘蛛伝承の世界は、令制下の一つの「郡」ぐらいに相当する地域において、その中心部にすでに大和王権の秩序に編入された在地首長があり、周辺にこれとかかわりなく、独自の地域集団を率いる中小の首長層が群立する状況を考えることができるとと思われる。

こうした状況は当然、古墳時代以降のことを指していると思われる。例えば直入郡の場合でいえば、まず竹田市西部の菅生（すごう）台地にあるセツ森古墳群の前方後円墳の被葬者に象徴されるような在地首長がある。彼はすでに大和王権の秩序に組み込まれている。『日本書紀』景行紀には、天皇の巡幸にあたり来田見邑（くたみのむら）に仮宮をおいたとあるが、こうした巡幸の条件整備をした首長とは、このような首長をさすと思われるのである。しかしその周辺の山野の中には、まだまだこのような首長と十分に提携していない大小の首長たちがいた。そういう首長たちのイメージが土蜘蛛伝承に語られていると思われる。 出典インターネット「OBS大分放送」

穴観音古墳（日田市内河野）
（概要）

墳丘の径二十メートルほどの円墳で国指定史跡になっている。その規模、構造ともに大分県下を代表する石室。筑後川流域の代表的な装飾古墳として知られる。玄室奥壁の前には石造の観音像が安置され、現在も信仰の対象となっている。

（文献）

日田盆地の南西部、盆地を流れる三隈川を望む台地上にある。国指定史跡。一帯は弥生時代から中世の複合遺跡として知られる。墳丘の径二十メートルほどの円墳で、内部主体は複室構造の横穴式石室。石室は南面に開口し羨道部を欠くが、現状で全長セメートル、前室の奥行二・六メートル、幅二・三メートル。玄室は奥行三メートル、幅二・三メートル。石室には大型の腰石を用い、持送りの少ない長方形のプランをもつ。その規模、構造ともに大分県下を代表する石室。筑後川流域の代表的な装飾古墳として知られ、壁画は玄室奥壁に同心円文と三角文、右側壁の一角に円文と鳥、前室の両腰石には同心円・舟、両手足を広げている人物が描かれている。前室の同心円文は円の部分を影線めうえで彩色し図柄の安定を図っているという珍しい例である。なお玄室奥壁の前には石造の観音像が安置され、古墳にまつわる日下部長者春春の伝説もあって現在も信仰の対象となっている。

出典 日本古代遺跡 大分

湖水伝承

口頭伝承による「日鷹伝承概」

「それはそれは育も、昔のそのまた昔の頃の話げな、日田ち言うところは、そんな頃は大きねー湖じゃったげな。そしち、湖ん形がちょうどハスのはっぱんかっこしちよっての？、そんな湖ん中に三つばかりしこめ一島がうかんじよったげな。なにしろ九州ん真ん中へらにあっちから、周りは、た？け山でかこわれちよったき、だーれんこられんごつある場所なき、時たま狼が鳴くごつあったげな。

ある暗ん話して、東ん方ん空から一羽ん大きねー鷹が飛んじ来て、湖んぐるりばグルグル回ちよったかち思うと、突然舞い降りちから、水面に羽を打ちつけちから北の方へ飛んで行ってしもうたげな。そしたら、黒（く）？り雲が突然わいち出て天ばおおてしもうたかち思うと、かみなりが地しびきを立てちゴロゴロ？ズドーン。ちこの世はもうおしまいちいうごつおちやえてね、おまけにものすごーつえー雨がたたきつけるもんなき、湖は底がひっくり返ったごつ、おおきねー渦がおこったげな、こん渦んために西ん方ん山がぐずれちから、湖ん水はごうごうち濁流になって、筑後ん方面に流れちしもうたげな。それが三日三晩続いちから、やっとなごつおさまったら、後には三つの丘と二つの川がのこちよったち。それが、東の日の隈、西の星隈、北の月隈で、この三つの隈にそった川が三隈川で、もう一つの川が花月川ちいよるとで。

そして、湖の跡の開けた大地が朝日ん中飛んで来た大鷹にちなんで、日鷹（ひたか）ち名付けそれが日高、日田ちなつたげな。又、水がひいたなき、ひいたがひたになつたちもいわれちよるとバイ。」

以上のような、日田盆地がかつて湖であったという伝説は、同様に「矢野家伝」や「豊西説話」でも見ることができるし、烏宿山の中腹には、当時船をつないだという「舟つなぎ石」があるという。また、「津江」の名の「津」は港などの意味を持ち、「江」は海水や湖水が陸地に入り込んだ場所の意味を持つ。どちらも水とかかわりのある文字であり、無視できない。

実際には大山町では、大山層（日田層）と呼ばれる、第四紀のものと見られる古い地層を見ることができる。これは古い湖の底に堆積したとみられる水成層で、珪藻類の化石が多く見られ、中には淡水魚の化石なども発見されている。このことから、大山一帯がかつて湖であったことに異論を挟む余地はないが、それは有史以前のことである。湖水があったことがどのようにして伝承されていったのか、またその当時に舟運が行われていたのかなど、興味は尽きない。大原神社の絵馬に見る鷹 出典 大山町誌

藤山の恒雄（藤山恒雄と彦山開山伝承）

春も終りに近い、彦山のけわしい山路を、のぼって来る一人の旅人があった。名前を善正と云い、中国のぎというところから、はるばる海を渡って来た坊さんだった。

美しい山の姿に、すっかり心を打たれた善正は、岩穴を見つけて住み、修業をつづけた。そして数年がすぎた。そのころ、藤山に、恒雄と云って、生まれたていそう気の荒い男が居った。狩をするのが大好きで、弓矢をもつては、毎日のように、山から山をかけまわっていた。

或る日のこと、獲物を追って彦山にやって来た恒雄は、岩穴の中の善正を見て、ふしぎな気分になった。何か解らないが、妙に心ひかれるものがあった。それからの恒雄は、狩のたびにやって来て、何かと、善正の身の廻りの世話をするようになった。

その内、言葉も少しずつ解るようになり、善正は恒雄に、生きものを殺すことを止めるように、何度も云い聞かせるのだったが、恒雄は、こればかりはどうしても止めようとしないのだった。

そんな或る日、恒雄の前に、一頭の裏白な鹿が現れた。恒雄は直ちに矢を放った。鹿は矢を負ったまま逃げて行った。あとを追って行くと、やがて鹿は力尽きてぱったり倒れた。その時傍の大きな桧の、繁った葉の中から、三羽の鷹が現われ、一羽が口ばしで刺さった矢を抜き、一羽は、翼をひろげてきずを撫で、残る一羽が、谷川の水を桧の葉に浸して鹿に吞ませると、鹿は忽ち生き返り、やがて走って行った。

恒雄は、身体がふるえ、何とも云えぬ哀しみで、胸が一ぱいになった。弓を捨て、矢を折り、善正の前にひれ伏して、教えをこうた。それからの恒雄は、善正のもとで、厳しい修業をつづけ、大そう偉い坊さんに、なったそうなの。彦山には、恒雄をまつたほこらが、いまでもあるという。（造領記より）

旧石器時代

長者原遺跡・平野遺跡・田代遺跡・千倉遺跡・松野原遺跡・柴尾遺跡

縄文時代

長者原遺跡・小迫辻原遺跡・穴原遺跡・萩尾遺跡・吹上遺跡・松野原遺跡・内河野遺跡 大部遺跡・隈山遺跡・若八幡神社遺跡

弥生時代

吹上遺跡、前期から後期に及ぶ土器片等出土。堅穴式住居跡・組合式石棺・土壇墓等が発掘される。

・朝日宮ノ原遺跡、前期から後期に及ぶ土器等が出土。堅穴式住居跡・甕棺墓・組合式石棺等が発掘される。

・小迫辻原遺跡 前期から後期に及ぶ土器等が出土。堅穴式住居跡・甕棺墓等が発掘される。

・早場遺跡 組合式石棺・甕棺墓等が出土。箱式石棺から後漢時代の方格規矩鏡出土する。

・早場第二遺跡甕棺等が出土する。

・平島遺跡 後期後半の環溝、堅穴式住居跡が出土。他地での環溝集落が形成されている。

・小迫辻原遺跡 二基の環壕居館跡がつくられる。

4世紀

・城山古墳 前方後円墳

・楽師堂山古墳 円墳で円筒埴輪が出土。

5世紀～6世紀

・ダンワラ古墳 金銀錯嵌珠竜文鉄鏡出土。

・姫塚古墳 蛇行剣が出土。

・平島遺跡 カマドを有する堅穴式住居跡が出土。

・成務天皇の時代 比多国造が置かれ止波足泥（鳥羽宿禰）といい、会所宮に居住する。

・法恩寺山古墳 変形五獣鏡・勾玉・直刀・雲珠等、が出土。四号墳に同心円文などが描かれる。

7世紀

・欽明天皇の時代 日下部君等の祖。邑阿自が鞍部して仕える。

・ガランドヤ古墳群 馬具・直刀・鏡・須恵器等が出土。舟や人物等が描かれる。

・穴観音古墳 舟・人物・同心円文等が描かれる。

・夕田・水目・刃連・慈眼山・月隈・星隈・藤山こ池辺等に横穴古墳がつくられる

・聖徳太子摂政となる

日田の中世

中井王の登場（9世紀）

、9世紀の豊後国日田地方に登場した。その名を中井王というのが、歴史上は「悪吏」として「暴政」をふるい、あたかも極悪非道の人物のようなイメージで考えられることが多い。しかし、「悪」の内容そのものは、時代によって少しずつ変わっていくものであり、また立場が異なれば、悪は善に変わることも歴史の真理である。

「悪吏」ということも、かれの時代の状況を考え、その内容を検討しないと、軽々しく断定できないように思われる。

中井王は、王を称していることから、天皇家の流れをうける人であったことがわかる。『豊後国志』ほ中井王について「按ずるに紹運録に日く、天武天皇第十二子を高市皇子という。皇子に三千有り。その仲を鈴鹿王という、官は大納言従二位大蔵卿。鈴鹿王の子を中井王という。『豊日志』に白く、正八位上中井王、大同中に豊後介となり、承和中に任すでに満ちてなお還らず。且つ地を掠めもって罪を獲れども赦に会過す。その子永弘は清廉籍蒸をもって、日田郡擬大領外従六位下を授けらる。王の父鈴鹿王、大蔵卿となる。よつてもって姓となすなり」と述べている。（日田市史参照）

大蔵氏（おおくらし） 豊後国日田郡、現在の大分県日田市の慈眼山周辺を拠点に日田郡の一部を支配していた地方の土豪。鎌倉幕府、室町幕府政権下の御家人。東漢氏大蔵氏族の庶家（分家）を称する。「豊後大蔵氏」とも呼ばれ、地名をとって「日田氏」とも称した。諱の通字は「永」。大友氏系では「親」をあてる。家紋は洲浜紋を使用した。

平安時代後期、11世紀終わりから1432年（永享4年）まで、400年弱の間、永弘の代の835年（承和2年）から16代永包の代の1444年（嘉吉4年）までの590年余りの間の日田地方を支配した。

豊後の大蔵氏は古代に九州の日田地方を支配していた日下部氏に代わって日田郡司になった。また擬任郡司ともされる。位は散位であつて、檢校を称する。

その後、日田での地位を確立していった大蔵氏は、中央の貴族に従属して、勢力を確固なものとしていった。鎌倉時代には、源氏方に加勢したことで所領が安堵され、鎌倉幕府政権下の御家人に取り立てられた。室町時代には室町幕府近侍の御家人である奉公衆であった。文化面においても大蔵氏は、大原八幡宮や永興寺（ようこうじ）、岳林寺（がくりんじ）を造営し華やかな文化を形成していったが1444年（文安元年）、身内の家督争いによって16代で滅亡し大友氏より養子を迎えて大友氏系で日田氏を再興したが、その大友日田氏も6代で系譜が途絶える。（ウキペディアより引用）

矢野家伝

（概要）

「矢野家伝」は、日田の湖水伝承や老松神社の起源、大山町の起源などが記されており、真偽の程は確実ではないにしろ、地域の文献として貴重かつ興味深いものである。全六巻からなる。

（文献）

「夕滞版」は、寛智五年の橘氏嵯峨門の序を巻頭に、「日田郡開起巻一 矢野熊五郎吉孟集撰」「大蔵氏系脈巻二 熊五郎吉孟集録」「矢野家伝秘巻三吉孟集録」「矢野家伝秘巻四 吉流編録」「矢野家伝秘巻五 吉流編集」「矢野家伝秘巻六 嵯峨門撰」の六巻から構成されている。

序によると、日田郡は蘭蘭以来鬼神家二十六代を経た後、大友氏が相続し、郡内は益々平和である。この両時代を通じて、坂本・高瀬・財津・羽野・石松・堤・佐藤・瀬戸口は八奉行といわれる郡老であったが、矢野氏も郡老と同じく政治に参加していたということは知られていない。それは、八奉行は郡底＝日田盆地に居住し、矢野は大山の部賤に居住していたことによるという。

津江氏の所有する「盛講乱は矢野家伝について、巻頭に日田郡司職鬼神家縁起を述べているが、地神何代の後胤と説明せず、非常に省略したものであると、偽書であると極めつけている。そして日田郡内にある家伝は、それぞれの大祖は不明となっているので、矢野家の祖、「土（くに）太夫先頭」の記録を中心として矢野吉孟が書き改めたものであると述べている。

ともあれ矢野家伝には、日田の起り（湖水が潤れて日田盆地が出現したという伝承）や老松神社の起源、大山町の起源などが記されており、興味深い内容になっている。特に天正十七年の検地内容は、同年の検地実施の裏付けとなる県下唯一のものであり、無視できない。

いづれにせよ、一家伝にすぎない本書が、少なくとも安土桃山時代からの記録が現存しているという事実は非常に興味深く、地域の文献としては大変貴重な存在である。 出典 日田郡の文化財

大原八幡宮

（概要）

日田盆地の東部に延びる丘陵の西端に鎮座する。天慶元年大山川・玖珠川の洪水により惣門が流失したが、門から社殿まで十余町あったとされる。大原八幡宮御田植祭は県指定無形民俗文化財であり、また大原八幡宮銅鉦も県の文化財に指定されている。

（文献）

日田盆地の東部に延びる丘陵の西端に鎮座する。祭神は菅田別尊・比売大神・大帯姫尊。旧泉社。大原宮・大原八幡嗣・大原山八幡宮・大波羅神社などともみえる。岩讃諫皇九年（681）日連郷岩松ヶ峰（現天瀬町馬原の山）に八幡宮の来現があり、これを祀ったという（日田造領記）。これが同所の鞍形尾神社であるが、貨富十三年（871）大蔵永弘が求来里の大原に社殿を建立、神宮寺もこれに伴い創立したと伝える。（豊後国史）。実智元年（938）大山川・玖珠川の洪水により惣門が流失したが、門から社殿まで十余町あったとされる。承保元年（1074）郡司大蔵永季の時に放生会が始まったという。豊後国守護大友氏の尊崇が厚く、豊西四郡の惣社として大原宮を定めたとき、神宮寺にも大般若経を寄進したと伝える。諾ぎ二年（1312）二月十五日の木造善神王像胎内名には大原宮とみえ、地頭永貞と記される。鶴誌二年（1351）一色範氏は当社に筑前夜須庄（現福岡県夜須町など）の田地五十町などを寄進、戦勝を祈願したという。日田大蔵氏とこれに続く日田大友氏の没落に伴い衰微したとみられるが、英支二十四年（1555）には石松鎮昌が再興の願主として大鼓を寄せている。天正検地では大原大宮司の知行分九町余のほかは禰宜四名の三町歩末満と神宮寺六坊の三町歩はどがあったという。斐策元年（1624）日田藩主石川忠総により田島に移され、求玖里の跡地は元大原または本宮と称された。蓮聖四年（1676）放生が再興、じ貞萃う四年（1687）石段の普請がなり、寛政期（1789？1801）には社殿が再建された。大原八幡宮御田植祭は県指定無形民俗文化財。大原八幡宮銅鉦は県指定文化財。 出典大分県の地名

岳林寺

1342年、後醍醐天皇の勅願で、渡来僧、明極楚梵により開山。境内の郷土資料館では仏像や書画、古文書など県指定文化財の多彩な歴史美術品を展示している。

慈眼山 永興寺 と 日田神社（相撲の神様）

この日田神社は相撲の神様で日田の郡司大蔵家鬼太夫永季およびその祖永弘、永興の三柱を祭っております。

永季は相撲が強く日田殿（ひたどん）と呼ばれ後三条天皇の天覧相撲で出雲の小冠者を倒して優勝したといわれ天覧相撲には十五回出場し、相撲の神様としてあがめられています。

野口雨情が「日田の底霧 古典の絵巻 鐘のひびきも慈眼山」と詠んだ慈眼山。その慈眼山内にある永興寺は、十一面観音立像など、運慶・快慶の流れをくむ仏師が作った仏像（国指定重要文化財）が安置されています。

678年

- ・北部九州に地震あり日田周辺に血泉湧出『日本書紀』
- ・大原八幡神、刃連郷岩松ヶ峰（馬原鞍形尾）に來現する（伝承）
- ・大宝律令制定される。和同開珎を作る
- ・二馬馬の金凝神社の石虎に刻銘あり、五馬一三か村の奉納と伝える
- ・713「豊後風土記」ができる。豊後国を八郡に分け、日田郡は郷伍所里一四駅一所ありと。津江地方は石井郷に属す
- ・『豊後国風土記』できる（現存のもの）
- ・郡司として大嶺日下部連吉鳴、小嶺日下部君犬国、主張日下部君死任命される『豊後国正税帳』
- ・磐田永年私財法
- ・790 九州で八万三千人の飢民あり 『続日本紀』
- ・『続日本後紀』に犬宰府が中井王追放を願うとの記事あり
- ・鬼藏大夫永弘日田郡司職に任ぜられる
- ・大蔵永弘犬原神社を元宮に移す。永弘、慈眼山に築城する『豊西記』
- ・石体犬明神が殿山（戸山）に來現する
- ・911 石井源大夫 会所宮より石井に退く、石井犬明神を祀る
- ・藤原純友反乱おこる 犬蔵永宣、乱の鎮圧に参加
- ・永宣羽野天満宮を創建する 『豊西記』
- ・大蔵永利日田郡界に五所の畠を築く犬肥庄が大宰府安楽寺に寄進される『天満宮安楽寺草創日記』
- ・慈眼山永興寺が建立される 『豊西記』
- ・1071 大蔵永季が朝廷で相掬をとるも十度に及んだが不敗であった二一〇四年迄）
- ・『日田郡司職次第』
- ・大蔵永季京都よりの帰途大肥庄村薄で病死する
- ・大蔵季働が弟永平二に日田郡司職を譲る
- ・大蔵永平 婿三幸田盛季に殺害される
- ・大蔵季守 大蔵季平の郎従に殺される
- ・1163 このころ日田荘できる（後鳥羽院御願所金剛心院領となる）
- ・大蔵永秀源氏に味方し、功により生葉郡を賜る 『豊西記』
- ・大蔵永隆生葉郡隈上荘地頭職を賜る
- ・慈眼山永興寺 毘沙門天立像銘 犬蔵永秀生年三五寇
- ・大蔵永秀毘沙門天像を造仏
- ・大蔵永炭 国東郡に一所を賜る
- ・日田荘地頭職安堵の下文
- ・將軍実朝の下知 永秀の一円知行が確定
- ・大蔵永綱 閑院殿と二条西洞院の扉橋造営に私財を献上する
- ・日田四郎跡伊美六郎兵衛尉の記事あり
- ・大蔵永信 異国警固番役を命じられる
- ・1266 蒙古藤状
- ・異国防御を御家人に命ずる
- ・文永の役 蒙古軍攻め来る
- ・大蔵永基 亀翁山龍宮寺（真光寺）を日隈山に開く『豊西記』
- ・永資、父永基と共に八角田（博多）に出陣し、筑前国下座郡三奈木荘を賜る
- ・日田荘地頭職 日田弥三郎永基『豊後国図田帳』
- ・『豊後国図田帳』作成 日田荘、大肥荘、竹田別符、得善名、田島今泉などが見える
- ・安岐郷内弁府十町及弘永名三十町、日田弥三郎永基に与えられる
- ・永興寺の四天王佐四体奉納される 『豊西記』
- ・日田永貞明極禪師に師事し岳林寺の創建にかかる
- ・1331 元寇の変
- ・北条氏滅亡する
- ・日田荘地頭職が阿蘇大宮司惟時に安堵直される
- ・豊後国御家人野仲三郎太郎道棟軍忠状に日田肥前次郎の名が登場
- ・今夷、焼尾、岩屋以下の寺領を日田肥前権守入道が押領する。
- ・1338 足利尊氏征夷大將軍となる
- ・日田詮永、築之山崎城に戦い敗死「『豊後国志』」
- ・日田詮永・長井貞広・宇都宮経ら南軍と筑後山崎に戦死「資料総覧」
- ・（天授五年）大蔵詮永、今川了俊に参陣「足利義満下文」
- ・南北朝の合一
- ・1395 日田殿、四代將軍義持の奉公衆の一人となる（小番衆）
- ・五月二十二目の状 豊後国人大友若党共也 肥田 田原 佐伯等の条あり 『満濟准后日記』
- ・舎弟八郎永好、兄永純の領地の奪取を謀てる
- ・岳林寺の釈迦三尊脇待普賢菩薩が寄進される
- ・日田永秀没す。嫡男七郎（永包）が跡目継ぐ
- ・永包、郎従今村左馬に殺害される（犬蔵氏血脈二十一代にて断絶）
- ・大友親満、日田大蔵氏をついで日田永世となれる
- ・大友十五代親繁の子親常、永世（親満）の跡を継ぐ
- ・日田郡守源国光朝鮮の漂流者を助け送り届ける
- ・日田郡守源国光、崇氏・大友氏らと朝鮮に使節を送る
- ・日田郡守朝鮮に使節を送る
- ・日田親有、御所の辻合戦にて戦死。親賢跡を継ぐ
- ・このころから親将、日田郡士と対立する。親将、大友義鑑に追われる。郡老支配始まる（八奉行）
- ・1543 種子島に鉄砲伝わる
- ・親将自刃する 日田大友氏滅ぶ
- ・大友義鑑の跡目を義鎮（宗麟）が継ぐ
- ・大友義鎮、大原八幡宮に竹田内八町歩を神領として寄進する
- ・大友宗麟、大原宮若宮修理に三町三反を寄進する
- ・大友氏、毛利氏との戦いに日田勢参陣する
- ・財津鑑永の跡目を治部少輔が安堵される
- ・築前秋月種実、日田大肥荘を侵略するも日田郡士の反撃にて退却
- ・日田郡士竹下宗珍、秋月種実に応ずる武の下合戦起る『豊西記、日田記』
- ・日田郡士、彦山を攻める
- ・坂本・財津両郡老、大友義統より筑前小石原攻めを命じられる
- ・1589 太閤検地

豆田町と隈町は、ともに戦国末期に城下町として開かれたのが始まりだとされています。

文禄三年(1594)、豊後日田・玖珠二万石の蔵入地代官を務めた秀吉配下の武将・宮城豊盛が日隈山（現 亀山公園）に城を築き、その対岸に開いた城下町が隈町の起源でした。慶長元年(1596)には、後に豊後佐伯藩の初代藩主となる毛利高政によって、現在の町割りの原型が造られたといい、当時は現在の中本町、隈1・2丁目を二重の堀と土塁で囲み、要所に木戸門を設けて朝夕に開閉していたといわれています。

一方の豆田町は、慶長六年(1601)に小川老岐守光氏が丸山城と称して月隈山に築城した際に、城の東側に十二町村より商家を移して町が開かれたとされます。

元和二年(1616)、譜代の石川忠総が美濃大垣から入封して、丸山城を改築して永山城と改め、城下町を花月川の対岸に移して豆田町に改名しました。

石川氏の入封するまでは、隈町が日田の中心地でしたが、永山城に居を構えてから豆田町に中心は移っていきました。

石川氏が寛永十年(1633)に下総佐倉藩へ移封されると、日田は中津藩の預かりとなります。

寛永十六年(1639)、日田は天領（幕府直轄地）に組み入れられ、永山城が廃されて麓に日田陣屋（日田代官所）がおかれます。

その後、一旦は日田藩松平領となりますが、すぐに再び天領となり、宝暦九年(1759)には九州の天領を統括する西国筋郡代がおかれて、日田は九州の政治経済の中心地となります。

これにより、九州各地から日田に向う街道は「日田街道」とよばれるようになり、幕府役人や代官所を訪れる者の往来が多く、江戸期を通して日田陣屋町は大いに繁栄しました。

全国の天領で「郡代」がおかれたのは、飛騨高山、美濃、日田の3ヶ所のみで、いかに日田が九州の拠点として重要視されていたかが分かります。

日田の先哲

俳人・中村西国 俳人・坂本朱 俳人・長野野紅 俳人・長野りん 義民・穴井六郎右衛門
大原宮文庫創業者・手島新左衛門 林業功労者・相楽吉三郎 高僧・釈法蘭 高僧・釈宝月
俳人・広瀬月化 俳人・広瀬桃秋 公益事業家・樋口安左衛門 高僧・釈法海
農学者・大蔵永常 経世家・塩谷大四郎 国学者・森春樹 公益事業家・草野宗内 教聖・広瀬淡窓孝弟烈女・広瀬秋子 経世家・広瀬久兵衛 公益事業家・山田常良 儒者詩人・広瀬旭荘
公益事業家・行時元達 三絶僧・野五岳 勤王家・長梅外 儒者・広瀬青 儒医・諫山菽村
文人・千原夕田 勤皇家・長三州 儒者・広瀬 林外

- ・1592 朝鮮出兵する。日田郡衆110名の参加あり
- ・朝鮮での振る舞いにて大友氏は領地召し上げられる豊後の国は太閤蔵入地となる
- ・宮部継潤 山口宗永 豊後を檢地する
- ・1594 宮本長次郎が日田・玖珠二郡の代官となり、日隈城を築城、田島村を移し、隈町をつくる
- ・毛利高致、隈藩主となる。日隈城に天守閣を築く
- ・隈町森家始祖、毛利高政に従って日田に入部
- ・黒田如水の家老栗山備後守、隈に在城して一年間当郡を支配する
- ・日田郡は毛利高致の支配となる
- ・来島康親、森藩主となる。有田郷は森藩領となる
- ・1601 小川光氏、丸山城を築く。丸山町（豆田町）成立
- ・日田郡有田郷を森藩に編入する
- ・毛利高政 佐伯藩に転封
- ・渡里村他四ヶ村千石を福岡城主黒田甲斐守室が拝領
- ・野村他三ヶ村千石を佐賀鍋島信濃守室
- ・石川主殿頭忠総日田藩主となる。丸山城を永山城と改める。丸山町を豆田町と改める
- ・中城村の一部の荒地を豆田町の屋敷地とする。石川忠総 日田郡の檢地をなす
- ・大原八幡神、石川忠総により現在地に遷宮される
- ・築後柳川城主田中隼人室の領地返上 後杵築藩預かる
- ・石川氏転封 日田玖珠二郡は中津小笠原、杵築小笠原の預かりとなる
- ・島原乱おこる
- ・二人代官、小川藤左衛門・牛川九左衛門が着任。永山城前に布政所を置く
- ・俳人中村西国生まれる
- ・小川九左衛門江戸から西下の途中事故死する
- ・小川藤左衛門正久・小川又左衛門行広両代官 日田陣屋に入る
- ・俳人坂本朱拙まれる
- ・高松地区が天領となる
- ・高松（大分市）地区天領となり、支配地七万石となる
- ・俳人長野野紅生まれる
- ・佐賀鍋島氏室の領地返上。この千石は両小川氏の支配となる
- ・日田郡二十五村農民、代官を訴える（藤山村騒動）幕府は百姓を処罰し、両代官をやめさせる
- ・日田代官支配地七万石は熊本藩主細川氏の預かりとなる
- ・山田清左衛門刊信（日田在陣）竹内三郎兵衛信就（高松在陣）の両代言の支配
- ・代官近藤助右衛門政勝（高松在陣）寛文11年まで
- ・山田清左衛門一人代官（高松在陣）
- ・將軍家綱、岳林寺へ三十石を寄進（友田村のうちから）
- ・1673 広瀬家（博多屋）始祖 豆田町魚町に移住
- ・俳人長野りん生まれる
- ・大原八幡宮再興される『造領記』
- ・二人代官永田七郎左衛門貞清（日田在陣三田次郎右衛門（高松在陣）
- ・代官永田七郎左衛門 両町の地子負担について調査
- ・姫路城主松平直矩、親藩日田藩主となる。直矩は来任せず
- ・手島新左衛門景大生まれる
- ・松平氏、山形へ転封。再び天領となる
- ・大原八幡宮楼門石段成る『造領記』
- ・代官三田次郎右衛門守良 高松在陣にて日田兼支 高六万二千石
- ・両町地子負担をはじめる。豆田町の免は六ツ、隈町は六ツ二分

- ・日田郡藤山村農民、庄屋を訴える
- ・代官小長谷勘左衛門正綱は高松在陣、日田兼支
- ・六月 隈町火災 町の半数以上（百五十軒）焼失
- ・中村西国没する
- ・代官室七郎左衛門重福、若殿室金右衛門同道、目田在陣、高松兼支 十万石支配
- ・隈町大火
- ・朝倉郡小石原村の陶工柳瀬三右衛門 小鹿田焼を開く（伝）
- ・正徳の胎
- ・隈町火事
- ・代官南条金左衛門高松在陣 日田兼支。
- ・隈 豆田祇園山鉾始まる『豊西記』
- ・日田郡百姓、幕府の巡見使に生活困窮を訴える
- ・南条代官、並柳村（湯布院）にて死亡 墓は大超寺にあり
- ・代官室七郎左衛門 高松在陣にて、日田天草兼支
- ・代官池田喜八郎季隆高松在陣 日田兼支十万石
- ・1717 大岡忠相、江戸町奉行となる
- ・大雨 大水害
- ・代官増田太兵衛永政目田在陣 高松兼支十二万三千八百六十五石支配
- ・有田十一村農民、上城内庄屋宅へ愁訴
- ・広円寺釈法蘭生まれる
- ・他領より四十名領内へ逃散 のち三百五十名逃散
- ・増田代官 領内に命じ大原八幡宮の道具を仕直す
- ・西日本一帯虫害により大飢饉に襲われる
- ・年貢は免除される
- ・長崎回米始まる
- ・俳人坂本朱拙没す
- ・代官岡田庄太夫着任 日田在陣高松兼支助合穀銀の判度を始める
- ・長福寺釈宝月生まれる
- ・長野野紅没す
- ・日田郡馬原村庄屋・組頭ら愁訴
- ・助合穀銀の設置（岡田代官）豆田町免六ツ三分、隈町免六ツ五分に増額
- ・城内筋十三ヶ村陽戸訴訟おこる。穴井六郎右衛門ら江戸に出兵
- ・日田郡馬原村 穴井六郎右衛門ら越訴
- ・日田郡五馬筋・玖珠郡から森藩領へ二千人逃散
- ・日田郡大山筋より久留米藩領へ八百人逃散
- ・日田・玖珠郡の農民、代官所へ強訴
- ・千原欣右衛門 苗宇帶刀を許される
- ・穴井六郎右衛門ら淨明寺川原で処刑される
- ・手島景大没す
- ・岡田庄太夫勘定吟味役に昇進し、長男岡田九郎左衛門が日田代官高松兼支
- ・大原八幡宮神輿、新調される
- ・長野りん没す
- ・岡田庄太夫の次男、掛斐十太夫代官として着任。最初の西国郡代に昇格
- ・大蔵永常 生まれる
- ・長福寺釈法海生れる
- ・広瀬家、豊後岡・杵築・府内三藩の御用達となる
- ・広瀬平八（月化）初めて竹田・杵築・府内藩の御用達となる
- ・森春樹生まれる
- ・豆田町大火
- ・郡代掛斐十太夫病死 掛斐富次郎十三歳で郡代となる
- ・豆田町大火 火元は丸屋幸右衛門
- ・掛斐富次郎郡代十八歳で死亡 弟杵五郎が幼少で郡代となる
- ・杵五郎 靱負と改名。ロシア船蝦夷地に来航し通商を求める
- ・広瀬平八、弟三郎右衛門（桃秋）家督を譲り、秋風庵に隠居する
- ・1782 広瀬淡窓生まれる
- ・天明の大飢饉
- ・広瀬秋子生まれる
- ・掛斐宗の養子造酒之前二十歳で郡代となる
- ・大水害 隈町の免は六ツ九分となる
- ・1790 広瀬久兵衛生まれる
- ・日田郡農民、献金にたいして不穏な動き
- ・掛斐造酒之助郡代を免職となる。羽倉権久郎代官着任
- ・大原杜造営 同十三年新社に遷宮
- ・大蔵永常 上坂する
- ・隈町火事
- ・淡窓 亀井南冥の塾に入門。森春樹『日田郡志・玖珠郡志』をつくる 有浦琴エ寺小屋 三遷堂を開く
- ・山田常良生まれる
- ・大蔵永常 『農家益』を刊行
- ・『豊後国志』編集
- ・淡窓 長福寺学寮で門弟教授を始める 樋口安左衛門 加々鶴新道工事を行う
- ・羽倉代官 西国筋郡代に昇格
- ・広瀬旭荘生まれる
- ・淡窓 桂林園を開塾
- ・羽倉代官没す
- ・羽倉左門（のちの簡堂）代官となる。平野五岳生まれる
- ・長梅外生まれる。三河口太忠輝昌西国筋郡代となる
- ・伊能忠敬日田を測量する
- ・森春樹 隠居し、家督を弟甚兵衛に譲る三河口代官 湯坪村にて急死 長男八郎輝長が代官となる
- ・田中町より出火 隈町百十四軒・竹田村二百二十四軒焼失・照蓮寺で十七人焼死
- ・1817 塩屋大四郎 代官となる
- ・広瀬淡窓、咸宜園を開く
- ・頼山陽日田を訪れる

- ・平野五岳、咸宜園に入門。広瀬青村生まれる 塩谷代官、陰徳倉を建てさせる
- ・塩谷代言、西国筋郡代に昇進
- ・月化没す。草野宗内・広瀬久兵衛の二人が中城村堀田村の庄屋に命ぜられる
- ・隈町・竹田村大火、焼失五百軒ばかりとなる
- ・小ヶ瀬井路工事に着手
- ・塩谷代官 豊前豊後各地の海岸で新田の開発に着手
- ・京屋山田常澄、隈川通船工事を完成
- ・大蔵永常、江戸に本拠を移す
- ・日田川通船、完成 『森家永代記』
- ・広瀬久兵衛 中城河岸を設ける。呉崎新田（豊後高田）の造成に着手
- ・千原家、はじめて小倉藩に貨付をする
- ・洪水
- ・大風、日田郡で二百軒吹き飛ばす 死者十名
- ・呉崎新田完成。面積三百六十町歩 工費三万両
- ・広瀬久兵衛、隠居し諸藩の藩政改革に専念する
- ・淡窓、旭窓に咸宜園を譲る
- ・千原夕田生まれる
- ・咸宜園官府の難起こる
- ・小ヶ瀬井路完成
- ・日田川通船 株仲間結成。森春樹『造領記』を脱稿する
- ・広久兵衛、掛屋を命じられる
- ・諫山款村 咸宜園に入門、長三州生まれる
- ・大蔵永常、三河国田原藩に招致される
- ・森春樹没す。大蔵永常三河田原藩の産物取立方に任ぜられる
- ・塩谷郡代 江戸城西の丸留守居役となる
- ・広瀬旭荘、堺に開塾 のち大坂に移る
- ・日田天領支配地は長崎代官の預かりとなる。
- ・大水
- ・寺西蔵太元栄、西国筋郡代となる。大塩平八郎の乱おこる
- ・寺西代官病死、墓は岳林寺にあり
- ・尾清左衛門、郡代に任ぜられる
- ・淡窓 苗字帯刀を許される
- ・大蔵永常、浜松藩の厚産方となる
- ・広瀬久兵衛、府内藩財政改革に着手
- ・広瀬旭荘江戸にて開塾
- ・玖珠川通船開設
- ・池田岩之丞、郡代に任命される
- ・広瀬久兵衛、苗字帯刀を許される
- ・七月台風・八月台風、凶作のため穀物高値となる
- ・千原家、小倉藩御用達となる
- ・池田代官、異国船防御のため献金を命ず
- ・淡窓、青村に塾政を伝える。長信成咸宜園に入門
- ・1856 広瀬淡窓没す（七十五歳）
- ・大風水で花月川氾濫
- ・草野中右衛門 苗字帯刀を許される。
- ・安政の大獄おこる
- ・大蔵永常「広益国産考」を刊行
- ・池田代官病死、長崎代官天鎖目田支配地を預かる
- ・屋代増之助郡代着任
- ・広瀬旭荘没す（五十七歳）
- ・「豆田町絵図」作成される
- ・郡代窪田胎部郎右衛門着任
- ・広瀬久兵衛、宇佐広瀬井路工事に協力
- ・窪田代官、日田の富豪に小倉藩に対し一万両の貸与を命ずる
- ・長州戦争用の軍資金献金を命じられる
- ・両町掛屋商人、「中極書之事」を作成
- ・窪田代官 小倉戦争に出陣 農兵隊（制勝組）を組織する
- ・千原家、二百八十九町歩の土地を集める
- ・制勝組の大調練が伏木で行われる
- ・小倉藩家老以下十七名日田に来る
- ・王政復古、幕府が倒れる
- ・日田郡騒動 割り返し金、年貢減免等を要求
- ・窪田代官、逃亡する。九州各藩兵が日田に入り込む
- ・1868 明治維新